

寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

今回は、小学校高学年から中学生で来日した子どもたちについて、「日本語の習得と教科学習」に焦点を当ててお話ししましょう。

この年齢の子どもたちは、小さい子どものように耳からほとんど言葉を取り込んで覚えることが難しくなっています。彼らには体系だった日本語指導が有効で、言語の4技能「聞く、話す、読む、書く」をバランスよく指導することが大切です(英語学習でも同じことが言われていますね！)。

今度も、彼らはすぐに「高校入試」という大きな壁に直面します。漢字熟語やカタカナ語など当たり前

一つハードルを越えても

習の単元がある場合も少なくありません。

5年生で来日した乙君は、母国で分数や関数などの勉強をしたことがありませんでした。友達もでき日本語が話せるようになったものの、中学入学後は学習に全くついていけな

めクラスの授業にも早い時期から参加できませんでした。物事の概念理解や思考もできたので、新しく習う内容も身に付けた日本語を「てこ」にして、学習に取り組むことができました。

このように母国でどれだけ学習を積んできたかというこ

とは、日本での学習理解に大きな影響を与えます。しかし、そこを

に教科書に出てくる言葉、つまり学習言語は彼らにとっては難解で、これらを理解しないとテストで点が取れません。一般的にその習得には5〜9年かかると言われています。さらに母国とカリキュラムが違うため、同じ学年に編入したとしても未

くなりました。勉強しても追い付かず、そのうちに学習意欲も低下。進路決定の時期には選択肢がほとんどなく苦労しました。

一方、母国で日本より早い進度で学習を積み上げてきた中学1年のY君は、既習の学習単元も多かったた

サポートする体制はまだ十分とは言えません。辛い思いをした乙君に対して我々周りの大人たちはもっと何かできることはなかったか、今も考え続けています。(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子)